

『經典』に学ぶ

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五

經文

衆生困厄を被^{こむ}つて。無^む量^{りょう}の苦^く身^みを逼^せめんに。觀^{くわん}音^{おん}妙^{めう}智^ちの力^{ちから}。能^よく世^せ間^{けん}の苦^くを救^{すく}う。神^{じん}通^{つう}力^{りき}を具^く足^{そく}し。広^{ひろ}く智^ちの方便^{ほうべん}を修^{しゆ}して。十^{じつ}方^{ぼう}の諸^{しよ}の国^{こく}土^どに。刹^{しやく}として身^みを現^{げん}ぜざることなし。種^{しゆ}種^{しゆ}の諸^{しよ}の惡^{あく}趣^{しゆ}。地^ぢ獄^{じやく}・鬼^き・畜^{ちく}生^{しやう}。生^{しやう}・老^{らう}・病^{びやう}・死^しの苦^く。以^{もつ}て漸^{ぜん}く悉^{しやく}く滅^{めつ}せしむ。真^{しん}觀^{かん}・清^{しやう}淨^{じやう}觀^{かん}。広^{こう}大^{だい}智^ち慧^え觀^{かん}。悲^ひ觀^{かん}及^{およ}び慈^じ觀^{かん}あり。常^{じやう}に願^{ねが}い常^{じやう}に瞻^{せん}仰^{ごう}すべし。無^む垢^{こう}清^{しやう}淨^{じやう}の光^{ひかり}あつて。慧^え日^{にち}諸^{しよ}の闇^{あん}を破^やし。能^よく災^{さい}の風^{ふう}火^かを伏^{ぶく}して。普^{あまね}く明^{あきら}かに世^せ間^{けん}を照^てらす。悲^ひ体^{たい}の戒^{かい}雷^{らい}震^{しん}のごとく。慈^じ意^いの妙^{めう}大^{だい}雲^{うん}のごとく。甘^{かん}露^るの法^{ほう}雨^うを澍^{しよ}(そそ)ぎ。煩^{ぼん}惱^{のう}の燄^{えん}(ほのお)を滅^{めつ}除^{じよ}す。諍^{じやう}訟^{しやう}して官^{かん}処^{しよ}を經^へ。軍^{ぐん}陣^{じん}の中^{なか}に怖^ふ畏^いせん。彼^かの觀^{くわん}音^{おん}の力^{ちから}を念^{ねん}ぜば。衆^{しゆ}の怨^{おん}悉^{しやく}く退^{たい}散^{さん}せん。妙^{めう}音^{おん}觀^{かん}世^せ音^{おん}。梵^{ぼん}音^{おん}海^{かい}潮^{しやう}音^{おん}。勝^{しやう}彼^か世^せ間^{けん}音^{おん}あり。是^この故^{ゆえ}に須^{すべ}らく常^{じやう}に念^{ねん}ずべし。念^{ねん}念^{ねん}に疑^{うたが}を生^うぜざることなかれ。觀^{くわん}世^せ音^{おん}淨^{じやう}聖^{しやう}は。苦^く惱^{のう}・死^し厄^{やく}に於^おて。能^よく為^{ため}に依^え怙^こと作^なれり。一^{いっ}切^{さい}の功^く徳^{とく}を具^くして。慈^じ眼^{げん}をもつて衆^{しゆ}生^{じやう}を視^みる。福^{ふく}聚^{じゆ}の海^{うみ}無^む量^{りやう}なり。是^この故^{ゆえ}に頂^{ちやう}禮^{らい}すべし。

現代語訳

「人びとが困難に遭い、苦しみにさいなまれているとき、觀世音菩薩のすぐれた智慧の力は人びとを救います。觀世音菩薩は自由自在の力を具え、どのような場合にも、その人の救いにピタリと当てはまる智慧を身につけていますから、いかなる場所にも現われて救いの働きをされます。こうして人間を怒り(地獄)・貪り(餓鬼)・愚痴(畜生)といった悪道から救い、生・老・病・死の苦しみをしだいに取り除き、ついにはことごとく消滅させるのです。

觀世音菩薩は眞實を見きわめる眼(眞觀)、迷いのない清らかな眼(清淨觀)、宇宙の万物を自分と一体と見る広大な眼(廣大智慧觀)、悩み苦しむすべての人を救ってあげたいというやさしい思いに満ちた眼(悲觀)、すべての人を幸せにしてあげたいという慈しみをたたえた眼(慈觀)を持っています。人びとは、常にそのような眼を持ちたいと願い、仰ぎ見て手本としなければなりません。

観世音菩薩の身からは、汚れなき清らかな光が放たれ、智慧は太陽のごとく、すべての迷いの闇を払い、もろもろの不幸を滅ぼして世の中全体を照らします。観世音菩薩の説かれる戒めは、人びとの苦しみを抜いてあげようという愛情に根ざしたものですから、その力は雷鳴のうち震うのごとく偉大です。また、人びとに幸せを与えずにはいられない心は、あたかも日照りに苦しむ国土を覆う大雲のようにありがたいものであって、甘露のように至上の味わいのある真理の教えの雨をあまねく降り注ぎ、煩惱の炎を消してくれます。

争いごとで役所の裁きを受けたり、それでも解決せずに力づくの戦いとなって恐ろしい目に遭うようなときでも、観世音菩薩の力を念ずれば、もろもろの忌まわしいことは、たちまち消え失せてしまうでしょう。

観世音菩薩は、至上至妙の真理（妙音）を説き、世のあらゆる人間の願いを明らかに聞き分けて（観世音）くれます。教えを説く声は清らか（梵音）で、説かれる真理の言葉は海鳴りのように人びとの胸に響き入り（海潮音）すべての迷いや苦しみを除いて（勝彼世間音）くれます。ですから、自分も観世音菩薩のようになりたいと常に思うことが肝心です。

ほんの一念にも疑ってはなりません。観世音菩薩は清らかな身であり、いろいろな苦しみや災難に遭ったときも、力強い寄り添いとなります。一切の功德を具えて、慈悲の眼で人びとを見てくれます。すべての川が海に集まるように、無量の福がその力によって呼び寄せられるのです。ですから観世音菩薩を礼拝し、その行ないに学んでいくことが大切なのです」

普門 この品の題にある普門の「普」とは、広くあまねく、どこにもかしこにもという意味です。「門」は、出入口の意味から転じて、家をさす言葉に用いられます。また、ものごとを分類する部門という意味もあります。したがって普門を直訳すると、「あまねくすべての家に」「人間が抱える問題のすべての部門に」という意味になります。わかりやすく言い換えれば、「この世のいたるところに、ありとあらゆる問題とあらゆる場面に、あらゆる場所に、自由自在に」ということになります。

意味と受け止め方

身近なお手本

如来神力品では、真理・法にそった歩みをつづけるならば、理想は必ず実現するということを学びました。しかし、理想を実現化させるためには、長い時間を要する場合があります。そのために、不断の努力を心がけていても、途中で不安を感じたり、挫折してしまうこともあります。

そこで釈尊は、さまざまな菩薩を登場させ、「この菩薩を手本として、菩薩の行ないをまねて歩いていけば大丈夫だよ」と、私たちを励ましてくださいます。この品の表題にある観世音菩薩も、私たちが手本として学ぶべき菩薩です。

「観音さま」と、古来、日本人に親しまれ、各地であついで信仰を集めている観世音菩薩は、世間のあらゆる人びとの苦しんでいることや望んでいることをよく察し、その人に応じた教えを説いて苦しみから解き放ち、また望んでいる方向へ導いてくださる菩薩です。そして、人を救い、導くときには、その人にふさわしい相をとって現われます。あるときは知識人や役人であったり、学者や先生、出家・在家の修行者、またあるときは子どもであったりします。さらには人間以外の生き物など、相手がいけば教えを受け入れやすい相に自由に身を変じて現われるのです。

こうした観世音菩薩の行ないに学び、手本とするということは、私たちもまた家庭や職場、地域などにおいて、相手が何に苦しみ、何を望んでいるのかをよく聞き分けて知り、どのようにふれあったら、私たちの声が相手の心に届くのかを見きわめたうえで救いの手をさしのべていくということです。その行動が、観世音菩薩の大慈悲心にほかなりません。

私たちが自身が観世音菩薩になるためには、まず私たちの身のまわりにも多くの観世音菩薩がいてくださることに気づくことが大切です。これまでに自分のまわりで起こった出来事などをふり返ってみてください。学校の先生、運動部でともに汗を流した仲間、職場や街なかで出会った人たち、佼成会のサンガなど、「あのとき、あの人ののおかげで」という経験がだれにもあるはずです。

そして、現在でも私たちのまわりには、私たちの成長・向上を見守ってくれる人、後押しをしてくれる人が必ずいます。大きな慈悲に裏打ちされた苦言をもって、自分を省みる機縁を与えてくれる人がいます。じっとまわりを見わたしてみましよう。私たちのすぐそばに、自らの成長・向上には欠かせない人たちがたくさんいることが

わかります。この人^{ひと}たちこそ、本^{ほん}仏^{ぶつ}から遣^{つか}わされ、さまざま^{すがた}な相^{へん}に変^{あら}じて現^{あら}われた観^{かん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}そのものなのです。

ここに気^きづけば、“身^み近^{ぢか}な観^{かんのん}音^んさま”をお手^て本^{ほん}として、私^{わたし}たちもきょうから観^{かん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}の行^{ぎょう}に踏^ふみ出^だせるでしょう。

まず人^{ひと}さま

私^{わたし}たちは観^{かん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}の行^{ぎょう}になら^い、自^{みづか}ら観^{かん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}になっ^てい^くことが大^{たい}切^{せつ}です。そして、身^みのまわり^にいろ^{いろ}な困^{こん}難^{なん}や争^あい^がが生^{しょう}じたときは、観^{かん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}の精^{せい}神^{しん}を思^{おも}い起^おこしま^しょう。摩^{まさ}擦^{さつ}や争^あい^ごとは、その大^{だい}小^{しょう}にかか^わら^ず、すべ^て「我^がの角^{つの}突^つき合^あい」「不^ふ寛^{かん}容^{よう}な心^{こころ}」から起^おこ^りま^す。自^じ分^{ぶん}の主^{しゅ}義^ぎ・主^{しゅ}張^{ちやう}、欲^{よく}とい^ったもの^を譲^{ゆず}ることができ^なければ、人^{ひと}と衝^{しょう}突^{とつ}する^のが当^{とう}然^{ぜん}です。また、自^じ己^こ中^{ちゆう}心^{しん}から生^{しょう}じ^る執^{しゅう}着^{ちやく}心^{しん}は、環^{かん}境^{きやう}の^{へん}か^うを受け^い入れ^{られ}ず、苦^く悩^{のう}を増^{ぞう}大^{だい}さ^せるも^とにな^りま^す。

い^けないこと^とはわ^かっ^てい^ても、相^あ手^てに譲^{ゆず}れ^{ない}、相^あ手^てを^{ゆる}すこと^ができ^{ない}とき、そして、大^{おお}き^な苦^{くる}しみ^や悲^{かな}しみ^に直^{ちやく}面^{めん}し、底^{そこ}知^ちれ^ぬ孤^こ独^{どく}の闇^{やみ}に沈^{しず}んで^いる^{とき}は、「すべ^ての^{ひと}の^{くる}苦^{くる}しみ^を抜^ぬき^さ去^さっ^てあ^げたい」とい^う観^{かん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}の大^{おお}い^{なる}願^{ねが}いと、やさしい慈^じ愛^{あい}にあ^ふれ^たお^も姿^おを^お思^{おも}い起^おこ^して^くだ^さい。必^{かな}ず観^{かん}世^ぜ音^{おん}菩^ぼ薩^{さつ}と心^{こころ}が通^{つう}じあ^いま^す。暗^{くら}く冷^{つめ}た^くな^って^いた^{こころ}に^ぽっ^と明^あかり^が灯^{とも}り、あ^たた^かく和^{なご}やか^{にな}っ^てき^ます。そう^すると、己^{おのれ}の^じ自^じ己^こ中^{ちゆう}心^{しん}の^{すがた}姿^きに^きづ^くこと^ができ[、]あ^るい^は生^いきる^{ちから}力^{ちから}が^わい^てき^て、自^{みづか}らの^{せい}成^{ちやう}と^たし^や他^た者^{じや}へ^の貢^{こう}献^{けん}に^ひチャ^びレ^んジ^{する}日^ひ々^びを^あ再^ふび^あ歩^{あゆ}み^はじ^める^こと^ができ^るで^しょう。

事例から学ぶ

事例編では、各品に込められた教えを、私たちが日々の生活のなかで、どのように生かしていけばよいかを、具体的な事例をとおして考えていきます。

鈴木さん一家プロフィール

おばあちゃん・ミチコさん（75）... 佼成会の青年部活動も経験している信仰二代目会員

アキオさん（45）... 一家の大黒柱。ミチコさんの末息子

アキオさんの妻・タカエさん（38）... 婦人部リーダー。行動派お母さん

長女・ケイコさん（16）... やさしい心の持ち主の高校一年生。プラスバンド部

長男・ヒロシくん（9）... 元気いっぱい的小学三年生

お客さま最優先

アキオさんが食品売り場の統括マネジャーをしている大型総合スーパーに、早朝、本社から担当事業本部長が視察に訪れ、開店前に全管理職を集めて定例のミーティングを開きました。

席上で本部長は、お客さまの満足度を百パーセントかなえられる商品の充実と売り場配置の研究、要望やクレームに迅速に対応できる柔軟性をくり返し述べたあと、最後に、パートを含めた売り場スタッフの教育の重要さを強調して本社に帰って行きました。

その日の昼、社員食堂でアキオさんは鮮魚売り場の田沼主任と並んでランチを食べていました。話題は今朝のミーティングの件です。

「鈴木さん、本部長はいつも同じ話しかしませんね。うちの店舗はお客さまアンケートの回収率が低いけれども、それなりにお客さまのニーズをキャッチして、販売に結びつけているんじゃないかと思っていますんですけど」

「まあ、お客さま最優先の対応は、商売の鉄則だからね。でも、あのようには毎回同じことをくり返し言われていると、本社からは、われわれの仕事が不十分に見えるのかなあと、そんな気にもなってくるよ」

「そうなんです。食品売り場はマネジャーを先頭に、私たち各セクションの主任

たちが、^{えきむ} 駅向こうのライバル店に差をつけるべく、^{きゃく} お客さまが^{あつ} 集まる^{きかく} 企画を一生懸命に^{かんが} 考えて、^{かいたい} いろんなフェアを開催しているんですから。^む 向こうの店より^{みせ} 企画力と^{しゅうきやくりよく} 集客力、^{はんばいじつせき} そして販売実績においても^か 勝っています。それなのに、これ以上何をしろうって^い 言うんでしょうねえ」

アキオさんはランチを^た 食べる手を^{やす} 休めて、しばらく^{かんが} 考え込むようなしぐさをしてから^い 言いました。

「いままでは、^{てん} ライバル店と^{きょうそう} 競争することが、^{みせ} うちの店を^{そんぞく} 存続させるエネルギーにもなっていたけど、もう、^{じだい} そういう時代は終わったんじゃないかな。あくまでも、^{きゃく} お客さまに^{だいかいじょう} どれだけサービスできるか、^{まんぞくかん} 代価以上の満足感を^{ていきょう} 提供できるかが^{もと} 求められてくる。さらに^い 言えば、^{ちいきしゃがい} 地域社会、^{しみん} 市民への^{ほうし} 奉仕という^{してん} 視点も^も 持たなくては^い いけないだろうね」

「^{てん} ライバル店を^{けお} 蹴落とすことが、^{じぶん} 自分たちが^い 生き残る^{のこ} 方法ではないということですか。^{きぎょうどりよく} 企業努力の^め 目がお客さまに^む 向いていなければ、^{なん} 何にもならないと」

「うん。それにはやはり、これまで以上に^{げんじょうぶんせき} しっかりとしたお客さまの現状分析と^{はあく} ニーズ把握が^{じゅうよう} 重要になってくるんだ。^{きゃく} お客さまが^{のぞ} 望んでいることは、^う こちらが^み 受け身でいては^い わからない。^{こえ} 声にならない^{きゃく} お客さまの^{こころ} 心の^{こえ} 声を、^{どうさつ} いかに洞察して^い いくか。そのことが、^{いじょう} いままで以上に^{もと} 求められている^{じだい} 時代なんだよ。^{たぬま} 田沼さん、^{かんぜおん} 観世音菩薩^{ぼさつ} について^し 知っているかい？」

「はい、^{かんのん} いわゆる観音さまですよね」

「うん、^{たぬま} 田沼さんも^し 知っているように、^{わたし} 私は^{りっしょうこうせいかい} 立正佼成会の^{かいいん} 会員で^{ぶつきょう} 仏教を^{しんこう} 信仰しているんだけれども、^{いぜん} 以前、^{こうせいかい} 佼成会で^{かんぜおん} 観世音菩薩の^{なまえ} 名前について^{まな} 学んだことがあるんだ」

^{かんぜおん} 観世音とは

「^{かんぜおん} 観世音の^{かん} 観とは^{かんさつ} 観察という^{ことば} 言葉があるように、^{みわ} ものごとをはっきりと^{みわ} 見分けること。^{せおん} 世音とは、^{しせい} 市井の^{ひと} 人びとの^{こえ} 声のことなんだ。^{こえ} 声といっても、^{くち} 口から^で 出てくる^{こえ} 声ではなくて、^{こころ} むしろ^{せつじつ} 心のなかで^{のぞ} 切実に^{かんぜおん} 望んでいる^{ぼさつ} ことをいうんだよ。つまり^{かんぜおん} 観世音菩薩は、^{せけん} 世間の^{ひと} あらゆる^{くる} 人の^{のぞ} 苦しみや^{のぞ} 望んでいる^{こと} をよく^{さつ} 察し、^{あう} それに^{おし} 応じた^と 教を^と 説いて、^{くる} その^と 苦しみから^{はな} 解き^{のぞ} 放ち、^{ほうこう} また^{みちび} 望んでいる^{ほうこう} 方向へ^{みちび} 導いて^{くださ} くださるんだ。そして、^{ひと} 人を^{みちび} 導くときは、^{あいて} 相手に^{すがた} ふさわしい^て 相をもって^さ 手を^さ 差し^{くださ} のべて^{くださ} くださるんだよ」

「^{どうさつりよく} ものすごい^も 洞察力を持って^い いるんですね。あやかりたいものです」

「^{ははおや} 母親と^{あか} 赤ん坊の^{かんけい} 関係で^{かんが} 考えれば、^{ははおや} わかりやすいかな。^{けいけん} 母親は^{かさ} 経験を^{あか} 重ねると、^{あか} 赤ん坊が^な 泣いていても、^な おむつがぬれているのか、^な おなかがすいているのか、^な だっこして

ほしいのかわかるものだよ。それと同じように、私^{わたし}たちはお客^{きやく}さまの心^{こころ}を“観^{かん}世^ぜ音^{おん}”して、お客^{きやく}さまに尽^つくさせていただく。他^た店^{てん}の動^{うご}きよりも、このことに集^{しゅう}中^{ちゅう}して仕事^{しごと}に臨^{のぞ}ませていただくことが、今^{いま}最^もも求^{もと}められていると思う^{おも}んだ。こうしていましゃべっているうちに気^きがついたんだけれど、おそらく、今^け朝^さの本^{ほん}部^ぶ長^{ちやう}の話^{はなし}も、そのように受^うけ取^とるべきなんじゃないかな」

「なるほど。本^{ほん}部^ぶ長^{ちやう}は毎^{まい}回^{かい}同^{おな}じこと言^いっているようだけど、言^{こと}葉^ばに含^{ふく}まれている意味^い合^みい^あが違^{ちが}うということですね」

「私^{わたし}たちの意^い識^{しき}が変^かわっていかないと、本^{ほん}部^ぶ長^{ちやう}の言^{こと}葉^ばの意^い図^とするところ^{ところ}は理^り解^{かい}できないのかもしれない」

その晩^{ばん}、帰^き宅^{たく}したアキオさんは、妻^{つま}のタカエさんに、きょうの出来^{でき}事^{ごと}を話^{はな}しました。

「そういう話^{はなし}が職^{しょく}場^ばででき、すぐ仕事^{しごと}に生^いかせるなんて、すばらしい環^{かん}境^{きやう}ね」

「そうだね。ランチの最^{さい}後^ごに、田^た沼^{ぬま}主任^{しゅにん}と私^{わたし}たちがス^すタ^たフ^ふー^り人^{ひと}ひ^ひと^とりの能^の力^{りよく}や性^{せい}格^{かく}はもちろ^ん、ど^どん^んな望^{のぞ}みを持^もち、ど^どん^んな不^ふ満^{まん}や悩^なみを持^もっているかをは^はき^きり^りと洞^{どう}察^{さつ}し、一^{ひと}人^{ひと}ひ^ひと^とりにふさわしい方^{ほう}法^{ほう}で対^{たい}応^{おう}できるよ^ようにな^なって^てい^いこう^{こう}と確^{かく}認^{にん}させてもら^もった^たんだ。それ^{それ}がス^すタ^たフ^ふ教^{きやう}育^{いく}の第^{だい}一^{いっ}歩^ぽだ^だと感^{かん}じた^たから^らね」

「仏^{ほとけ}さまの教^{おし}えは、いつ^{いつ}でもど^どこでも生^いかせるの^のね」